

<答え>

基本的には「眠り姫」などと同様、女性の対象発見の物語でしょう。一人で金の鞠で遊ぶ姫は自己充足的な世界に生きています。蛙の要求は求婚、特に性的関係の要求を表しています、自足的世界に生きる姫には「冷たくて、気持ち悪いもの」にしか映りません。つまり本来、若くて美しい王子を気持ち悪い蛙に変えたのは他ならぬ自己愛的な姫です。姫がこうした自己充足的世界から抜け出して他者と（特に異性と）関係を持つことができるためには、父親による掟の施行が必要で、それがこのメルヘンでの、約束を守らせる王さまの役割です。それによって両親との近親相姦的關係から抜け出すことが可能となります。魔法によって醜い動物に姿を変えられた王子様がもとの美しい若者に戻るというストーリーは良くありますが、女性の側の愛によって魔法を解かれるというパターンが多いように思えます。このメルヘンではしかし、女性が怒りに任せて蛙を投げつけたことが魔法を解いており、その意味でやや特殊なパターンです。これは、他の多くの変貌物語が男性の側の魔法からの解脱を扱っているのに対し、このメルヘンのテーマが女性の側の自己充足世界からの解脱だからかもしれません。魔法は王子に掛けられているのではなく、姫の方が自己充足的な魔法の世界に生きていたのです。最後にハインリッヒの鉄のたがのエピソードはいまだに私にも謎です。